

バーナード・ウィリアムズにおける倫理学理論の中心問題  
The Central Problem of Ethical Theory on Bernard Williams

安藤隆之

**Abstract**

This paper discusses the critique of ethical theory presented by Bernard Williams. Although his critique of ethical theory has been interpreted in various ways among researchers, these interpretations fail to capture the central point of his critique. In this paper, first I will mention several problems of these interpretations and next will argue that the central problem of ethical theory Williams brought up lies in an ambition of “discursive rationality” that promotes clear understandings of ethical thoughts and practices through abstract and general reasons and inferences. The fundamental objection to ethical theory is that its conception of rationality misunderstands our ethical life and the world.

**(1) 研究テーマ**

本研究の対象は、バーナード・ウィリアムズの倫理学理論批判である。本稿では、彼が指摘した倫理学理論の中心問題——倫理学理論そのものが抱く合理主義的野心の問題——を解釈し提示することを目的とする。

**(2) 研究の背景・先行研究**

20世紀半ばから倫理学において活動的になった潮流として、反理論 (Anti-Theory) というものがある<sup>1</sup>。反理論とは、「倫理学理論と呼ばれる観点から倫理的問題についていかにして考えないかに関心をもつ、消極的な方法論的立場」(Robertson 2017: 678)である。倫理学理論とは、我々の倫理的な主題についての体系的で理論的な説明を与え、善悪や正不正についての一般的な判定基準や原理を含む、そうした主題に対するアプローチの一つである (Williams 1985: 80)。代表的なものとしては功利主義やカント主義、契約主義などがあり、これらの理論は現在に至るまで近現代の倫理学において支配的な地位を占めてきた<sup>2</sup>。倫理学における反理論とは、こうした理論のアプローチを拒否する見解を総称した立場である。とはいえ、反理論家が理論のいかなる特徴や側面を拒否するのかは論者によって異なる (e.g. Chappell 2009; Stocker 1976; Wolf 1982)。そのため、反理論を特徴づけているのは、

基本的には理論に対するその否定的で消極的な見解である<sup>3</sup>。

本稿で注目するウィリアムズはこうした反理論の代表的な論者のひとりであり、彼の批判は大きな影響をもってきた。それにもかかわらず、その批判のポイントが判然と整理されて論じられることは少ない。とりわけ、倫理学理論そのものに対する彼の批判の要点を的確に抽出する試みはわずかである<sup>4</sup>。既存の解釈によれば、ウィリアムズは倫理学理論が不偏性や道徳的義務、外的視点といった考慮を偏重してしまうがために、それが我々の個別の関心や従事 (engagement) の価値を不当に低く評価してしまい、我々は実践の生活において疎外されてしまうという批判を行なったとされる (Nagel 1986: 189-193; Thomas 2024: 50-53)。もちろん、功利主義やカント主義といった倫理学理論はこうした特徴をもつことに由来するさまざまな実践的問題を生じさせるし、ウィリアムズもいくつかの論文でこうした問題を指摘している (Williams 1976; 1982)。しかしながら、こうした実践的問題は彼の倫理学理論批判における中心的な論点ではないと筆者は考える。その論点は次節で提示するとして、ここでは、なぜ従来の解釈が、その中心的な問題に迫ることがなかったのかについて考察したい。

さて、ウィリアムズの倫理学理論批判がこれまで十分に解釈されてこなかった理由として考えられるのは、従来の解釈が彼の議論に見られるいくつかの批判を明確に区別してこなかったから、というものである。ここにはしかし、二層の区別が存在すると筆者は考える。まず、彼の議論は道徳批判と倫理学理論批判に区別して解釈することができる。前者では、定言的で優越的な義務 (obligation) や努め (duty) という観念を中心に据える近代的な道徳の体系が主な批判の対象とされている。それに対して後者では、たとえばキリスト教やカント倫理学の影響を強く受けた義務の観念というものが同じ仕方で標的にされているわけでは必ずしもない。後に筆者は、後者における批判の対象が、あらゆる倫理的主題を体系的・理論的に理解し説明せんとする合理主義的な野心にあったという解釈を展開する。また、倫理学理論批判と一概に括られる彼の議論についても、そこにはもう一層の区別が存在している。それは、個別の倫理学理論を標的とした批判と、倫理学理論そのものを標的とした批判との区別である。彼は実際に、シジウィックの倫理学を検討する中で、そこには「功利主義に特有の問題もあれば、体系的な倫理学理論の莫大なプロジェクトに特有の問題もある」(Williams 1982: 153) と論点を区別している。また別の箇所でも、倫理学理論そのものの特徴を個別の理論と明確に区別しながら論じている (Williams 1985: chs. 5-6; 1989: 47-50)。この区別が認識されない限り、倫理学理論そのものに向けられた彼の批判の

重要な論点を理解することはできない。そのため、倫理学理論そのものに特有の問題を明かすべく、彼の議論を再解釈する必要がある。

### (3) 筆者の主張

では、倫理学理論そのものが抱える中心問題とは何か。筆者の見立てでは、それは倫理学理論が自身の野心として中心に据えている「論証的合理性 (discursive rationality)」(Williams 1985: xvi)、すなわち倫理的思考や実践についての明晰な理解を抽象的・一般的な理由や推論を通じて哲学的に追求しようとする合理性にある。そして、これを称揚する合理主義な倫理解は我々のリアルな生について根本から誤解してしまう。この誤解こそ、倫理学理論そのものの問題に他ならない。これまでの解釈では、倫理学理論が不偏性や道徳的義務、外的視点を強調してしまうということが争点になっていた。それらはもちろん我々の人生の意味や生き方に深く関係する重大な問題だが、しかしあくまでこの合理主義の誤解に付随する問題である。むしろウィリアムズの批判の核心は、その合理主義的な理解が我々の倫理的思考や実践の忠実で正確な理解に決して到達することがないという点にある。つまり、その理解が我々の倫理的世界や生の解釈として意味をなさないということが、倫理学理論に対する根本的な批判となるのだ (cf. Williams 1985: 98)。では、彼は具体的にどのような誤解の問題を指摘していたのだろうか。

理論の強みは、その普遍性と再現性にある。すなわち、理性的主体であれば誰でもその理論が提供する材料と推論に従うことで同一の結論を導出できるという点にある。そうした結論を万人にアクセス可能にするために、理論は、倫理的問題を解決する判定基準や推論の方法、その材料となる特定の倫理的考慮等についての説明がきちんと書き出されうるものであることを要求する。ウィリアムズはこの枠組みを「説明的合理主義 (expository rationalism)」(Williams 1985: 111) と呼び、ある関係や手続きが誤解や欺瞞に基づくべきではないとする透明性 (transparency) の理想と比較しつつ、それを批判する。すなわち、説明的合理主義の要請は透明性の理想からは必ずしも導出されるものではないばかりか、その要請はそもそも倫理的な生というものを捉え損ねている。

社会的、倫理的な関係は本来それらについての無知や誤解に基づくべきではないという〔透明性の〕願望は、それらの関係に含まれるあらゆる信念や原理が明示的に述べられるべきだ、という願望とはまったく別のものである。これらが二つの別々の事柄であることは、個人的な関係に

ついて考えれば明らかだろう。すなわち、個人間の関係が詐欺や誤りに基づかないでほしいと望むことはまともだが、その関係の基礎が完全に明示されねばならないと考えるのは愚かである (ibid.: 113; 亀甲括弧内は筆者補足)。

このように、倫理的思考や実践のすべてが、倫理学理論が想定するような仕方では明示可能であるわけではない。我々の多くは、自らの生きがいを構成するプロジェクトや、パートナーや友人との親密な関係を重視するという倫理的生の理想をもち、それに対する自分との関係が透明であってほしいと望む。しかし、それらと自分とのあいだにある深いコミットメントや愛で結ばれた関係の基礎がきちんと明示可能でなければならないという想定は、理想的な倫理的関係についての病的なまでに強迫的な捉え方だろう<sup>5</sup>。

同様の論点は、倫理学理論が正当化について持つ合理主義的な考え方にも現われている。ウィリアムズによれば、倫理学理論はある種の批判的反省、すなわち我々の直観や行為がいかにして合理的に正しいものかということを示す「正当化理由 (*justificatory reasons*)」(Williams 1985: 124) を追求する反省によって生み出される。つまり、倫理学理論は、すべての直観や行為について、それらを正当化する理由が提供可能か否かによって、それらが合理的か不合理的かを決定できるという想定を行うとされる。

しかし、この想定は誤解である。なぜなら、ウィリアムズによれば、我々の直観や行為には、倫理学理論が提供する正当化とは関係なくそれ自体で合理的・不合理的なものが存在するからだ。たとえば、目の前で自分のパートナーと見知らぬ人が溺れているとき、パートナーを先に救助するという行為に正当化理由が必要だと考えるのは誤りである (Williams 1976)。なぜならば、この行為は、「その人がまさに自分のパートナーだから」という純粋な理由だけで合理的と見なされるからだ。ところが、倫理学理論によれば、選好や義務といったそれぞれの理論が重視する倫理的考慮に基づいてその行為に一般的な正当化理由を与えることでしか、その行為を合理的行為として特徴づけることはできない。しかしこうした理由は、それが動機づけ理由であれば「一つの余計な思考」(ibid.: 18) を行為者に強いることになってしまい、行為者の動機と行為の統合性を失わせてしまう。また、それが行為の正当性を説明する理由だとしても、それは「間違っただ種類の理由」(Darwall 2006: 15) となってしまう。つまり、ある冗談を面白がるのが道徳的な意味で問題だという事実から、その冗談は面白くないという結論を出すのが誤りであるように、パートナーを助けることが効用を最大化しないとか道徳的義務に

反するという事実から、その救助は正しくないという結論を出すのは誤っている。

このように、倫理学理論はすべての信念や行為について、それが合理的だとされるためには一般的な正当化理由が提示可能でなければならないと考える。しかし、そうした想定とは異なり、我々が親しむ倫理的世界には、倫理学理論が要求するような明示や正当化を必要としない種類の事柄や、さらにはそうした要請を拒む種類の事柄が存在しているのである。

また、倫理学理論は分析の対象となる倫理的思考や実践についての明晰な理解を求めるために、「還元主義」(Williams 1985: 18)を引き入れる。すなわち、関連する多くの現象や考慮を、非常に少ない基本的な概念や資源を用いる単一のパターンに組み入れることで、単純なモデルであらゆる事柄を説明するという還元の営みを引き入れるのだ。こうした還元主義的な野心は倫理学理論と不可分である。というのも、できる限り少ない道具立てでもって、数多くの主題について包括的かつ情報に富んだ仕方で説明を与えるという、強力な儉約的説明への傾向というのが、理論の本質的な特性だからだ。このように、倫理学理論はそれが対象とする倫理的思考や実践について、善や正、選好といったできる限り一般的な、独自の内容をもたない概念と考慮でもって、我々の倫理的世界と生を解釈できると考える (cf. *ibid.*: 129-130)。

しかしながら、還元主義的な試みも我々の倫理的世界と生の正確な理解に到達することはない。たとえば、カント主義は倫理的考慮を究極的には義務や努めといった概念に限定し、功利主義は選好や快樂を最大化する事態といったものに限定する。このように、倫理学理論は倫理的価値を担う考慮を鋭く限定し、単純なものを見なすことで、我々の倫理的世界と生についての一面的な理解を提供する。しかし、それは我々人間の複雑で偶然的な生というもののリアリティを理解することを妨げている (Robertson 2017: 685)。我々の倫理的思考や実践は善や正といった薄い抽象的な概念だけでなく、勇敢や誇り、愛、誠実といった具体的な濃い概念で満ち溢れており、かつ我々の人生は後悔や確信、恥といった多様な倫理的現象で彩られた重層な空間のなかにある。こうした事柄を記述し理解するためには、それらと対応する思考や概念が実際に必要なのであって、それ以下ではやっていけないのである (Williams 1985: 19)。そしてウィリアムズによれば、理論のこうした傾向は、「二つの考慮があった場合に、それらを比較することができる共通の考慮がないかぎり、それらを合理的に比較することはできない」(*ibid.*)という、「合理性についての合理主義的な捉え方」(*ibid.*: 20)の想定に基づいている。しかし、熟慮に現われる多種多様な考慮の材料を相互に比較可能なものにす

る共通の考慮が存在しないからといって、我々の日々の熟慮が不合理なものになるわけでは全くない。以上のように、理論の還元主義的傾向もまた、常に何らかの物差しを要請するという特殊な合理性理解に支えられている。

このように、倫理学理論は特殊な合理性理解と合理主義によって我々のリアルな倫理的思考と実践について誤った理解をもつために、リアルな倫理的現象で溢れているこの世界と生についてのどこまでも歪んだ描像しか提供できない。この描像は、多様な倫理的観念を貧窮なものにし、倫理的な事柄についての思考法を矮小にする有害なものである。そして、この問題が派生的に、従来解釈が指摘してきたような実践的諸問題をもたらすのである。

#### (4) 今後の展望

最後に、筆者の解釈に基づくウィリアムズの反理論的立場が今後直面するだろう課題に言及し、それを踏まえて今後の方向性を素描したい。

第一に、筆者の解釈は、倫理学理論を破棄すべきではないという批判に回答する必要がある。たとえば、反論者は倫理学における客観性や普遍性、あるいは道徳的ジレンマや不正・悪への対抗における倫理学理論のニーズを強調するかもしれない (Nagel 1997; Nussbaum 2000)。第二に、筆者の解釈は、倫理学理論のアプローチを否定してしまったら、我々は倫理的なるものについて一体どのように考えればよいのか、という疑問に答える必要がある。たとえば、反論者はウィリアムズが倫理学理論の代替物となるようなものを何も用意していないとして、彼の議論の否定的・消極的側面を問題と見なすかもしれない。

これらの反論に回答するためには、反理論の立場が倫理学理論に取って代わる思考や見方、言語空間を提供することができ、かつそれらを用いることで我々は倫理学理論に訴えるよりもより上手くやることができるということを示さなければならない。そこで、実質的な内容をもった反理論の倫理学の構築が本研究にとって喫緊の課題となるが、ここではそうした実質的内容を提供しうる二つの可能性を示唆しておきたい。

一つは倫理的生活の現象学である (Williams 1985: 103)。これは自然的態度の現象学的還元といったフッサール由来の哲学を指すのではなく、恥や誠実さ、運、確信といった、さまざまな様相や濃い概念で表現されうる我々に馴染み深い倫理的現象や体験を記述し養っていく営みを指す。この営みは、我々が個別具体的な場面でどのような概念や見方を通して世界を理解し体験するかを心理的・社会的洞察を通して明らかにし、そうした理解や体験のあり方を踏まえた上で我々はどう振る舞うべきかという規範的問題にも達する

ものである。我々は先に、倫理学理論が特定の合理性理解に基づく還元主義的傾向をもつことを確認した。しかしウィリアムズによれば、「実のところ我々の主要な問題は、倫理的観念が多すぎるのではなく少なすぎるということであり、それゆえ我々はできるだけ多くの観念を培わなければならない」(ibid.: 130)。

もう一つの可能性は「自信」(ibid.: 189)である。倫理学理論を棄却した今、我々はどのようにして倫理的問題についての確信を持てばよいのか、という問題が反理論家であるウィリアムズに投げられるかもしれない。このとき、知識による確実性でもなければ実存的な決断にも依存しない、社会と歴史への視座を備えつつ実践の生活に身を置くなかで養われる自信の可能性に開かれていることが、この問題に対処する助けとなるかもしれない。倫理学理論は論証や推論によって倫理的に正しい行為を導出し、それを確信に据えて生活を送るよう人々に要求する。しかし、生きがいに深く関わりうるそうした確信は思弁によって一発で身につく類のものではない。むしろそれは、我々が教育や躰を経て、そして土着の文化とその外部の価値観との衝突や擦り合わせを幾度も経験する中で身につけていく類のものだろう。このように、我々の倫理的確信は社会的実践や歴史的反省、個別の献身やケア、プロジェクトへの従事といった幅広い体験を通じて身につけていく自信によって構成される、という可能性を反理論の倫理学は見据えることができる。

## 注

<sup>1</sup> ただし、哲学的な理論化傾向に反対する思想自体は古くから存在する (cf. Nussbaum 2000: 227-229)。

<sup>2</sup> ただし、徳倫理学や道徳的個別主義といった判定基準の存在に懐疑的な立場を倫理学理論に数え入れられるのかは、評価が分かれている (Chappell 2009; Hooker 2012)。本稿ではさしあたり、功利主義やカント主義、契約主義などウィリアムズが実際に言及する立場を倫理学理論と見なすことにする。

<sup>3</sup> とはいえ、反理論家は積極的な計画や目標を何も持っていないわけではない (cf. Robertson 2017: 678)。

<sup>4</sup> たとえば、ウィリアムズの倫理学理論批判が展開されている中心的テキストである *Ethics and the Limits of Philosophy* (1985) を主題とした論文集 *Ethics Beyond the Limits* (2018) においても、彼の倫理学理論批判を主題とする論文は存在せず、副次的に言及されている論文でさえ同論文集に収録されている一本の論文のみである (cf. Smyth 2018)。

<sup>5</sup> マーサ・ヌスバウムは、倫理学理論にはガイドラインが明示的に書き出

し可能か、あらかじめ埋め込まれている必要があることをまず認める。しかしその上で、理論の多くは自身の説明に限界を有しているため、愛情や宗教的献身といったものの基礎のすべてが書き出し可能であると想定するとは限らないと示唆する (Nussbaum 2000: 235)。ところが、この示唆は次に、理論がそういった限界を抱えつつもどのようにして自身の目標の一つである倫理的な主題についての明晰な理解に達するのか、という疑問に晒される。

#### (5) 参考文献

Chappell, T. (2009) "Ethics Beyond Moral Theory," *Philosophical Investigations*, 32 (3): 206-243.

Hooker, B. (2012) "Theory versus Anti-Theory in Ethics," Heuer, U. & Lang, G. (eds.) *Themes from the Ethics of Bernard Williams*, Oxford University Press: 19-40.

Nagel, T. (1986) *The View from Nowhere*, Oxford University Press.

Nagel, T. (1997) *The Last Word*, Oxford University Press.

Nussbaum, M. (2000) "Why Practice needs Ethical Theory: Particularism, Principle, and Bad Behaviour," Hooker, B. & Little, M. (eds.) *Moral Particularism*, Oxford, University Press: 227-255.

Robertson, S. (2017) "Anti-Theory: Anscombe, Foot, and Williams," Golob, S. & Timmermann, J. (eds.) *The Cambridge History of Moral Philosophy*, Cambridge University Press: 678-691.

Smyth, N. (2018) "The Inevitability of Inauthenticity: Bernard Williams and Practical Alienation," Chappell, S. & Ackeren, M. (eds.) *Ethics Beyond the Limits: New Essays on Bernard Williams' Ethics and the Limits of Philosophy*, Routledge: 188-208.

Stocker, M. (1976) "The Schizophrenia of Modern Ethical Theories," *The Journal of Philosophy*, 73 (14): 453-466.

Thomas, A. (2024) *The Ethical Philosophy of Bernard Williams*, Cambridge University Press.

Williams, B. (1976) "Persons, Character, Morality," his (1981) *Moral Luck*, Cambridge University Press: 1-19.

Williams, B. (1982) "The Point of the Universe: Sidgwick and the Ambitions of Ethics," his (1995) *Making Sense of Humanity: and Other Philosophical Papers 1982-1993*, Cambridge University Press: 153-171.

Williams, B. (1985/2011) *Ethics and the Limits of Philosophy*, Routledge

Classics, Routledge.

Williams, B. (1989) "Modernity and the Substance of Ethical Life," his  
(2005) *In the Beginning Was the Deed*, Princeton University Press: 40-51.

Wolf, S. (1982) "Moral Saints," *The Journal of Philosophy*, 79 (8): 419-439.

(東京大学)